

答志島の信仰習俗と集落組織

—注連縄と大般若札について—

梶山沙織・内田忠賢

以下の3本のレポートは、三重県鳥羽市に属する離島、答志島に関する調査報告である。このフィールドワークは、内田が担当する本学大学院2004年度開講科目「環境文化論演習」および「地理環境学特別講義・演習」(各2単位)の一環として実施した。4～7月前半に準備、7月17日～22日に現地調査、8～12月にレポートの作成および内容の検討を行った。参加者4人は全員、フィールドワーク初体験の院生である。梶山は日本中世史、福嶋は近代地域経済、ローマからの留学生グロリアは家族法、鶴貝は近世日本の歴史地理が専門である。しかし、彼女たちは独自の視点で精力的にフィールドワークを行い、専門性を生かしながらレポートを作成した。現代の離島、漁村の調査報告として、一定の水準に達したと判断したため、本誌に収録していただいた。時代の記録としても貴重であろう。なお、同時に実施した学部学生の調査に関しては、『答志島調査報告』(本学地理学教室編・発行、2004年)を公刊した。併せて、ご参照いただければ、幸いである。

答志島は、鳥羽市の中心市街地から北東に1.4 kmの海上に浮かぶ、連絡船で30分ほどの離島である。行政上は鳥羽市答志町・桃取町に属し、総面積約8 km²、世帯数約800、人口約3,000人強、

高齢人口率約20%強の単独島である。和具、答志、桃取の3集落からなる(図1)。就業者に占める漁業従事者は約50%と漁業が中心だが、旅館、民宿など観光サービス業も盛んである。伝統社会としての特色は、寝屋子と呼ばれる若者組(宿)のシステムが、現在も機能することで知られる。また、海女漁業でも有名である。今回の調査レポートでは、梶山は信仰生活、福嶋とグロリアは漁業労働、鶴貝は災害認識に注目した。(内田)

1. はじめに

答志島には答志、和具、桃取の3集落があり、答志と和具は島の東側に隣接し、桃取集落は西側にある。人口は答志が最も多く、ついで桃取、和具となっている。各集落は夫々生業や歴史が異なり、また気質も異なっていると言われる。生業で言えば、答志・和具は漁業が中心であり、桃取は定期船で本土に通勤する割合が高い。また、桃取では中学生も本土に通っている。

集落を構成する組織は各集落で共通しており、生業に関して漁業協同組合(漁協)、生業とは直結しない生活に関係する組織として町内会やセコ、組、消防団などがある。また信仰組織として氏子、檀家等の組織もある。これらは構成員や役割などがある部分重複し、ある部分で乖離して集落内に重層的に存在している。また各集落で組織間の関係は異なっている。

漁業が主な生業である答志では漁協の影響力が強い。町内会の下には、居住地域により組織されるセコがあり、セコ総代がまとめる。後に見る桃取と違い、答志のセコは檀家や氏子組織とは別個の存在である。セコの下には組があり、組・セコを通して集落全体を各戸単位で把握している。また町内会内に青年団があるが、これは漁協の青年団とは別組織である。町内会青年団出身者はその後、消防団に入るが、これは集落内で一種のステ

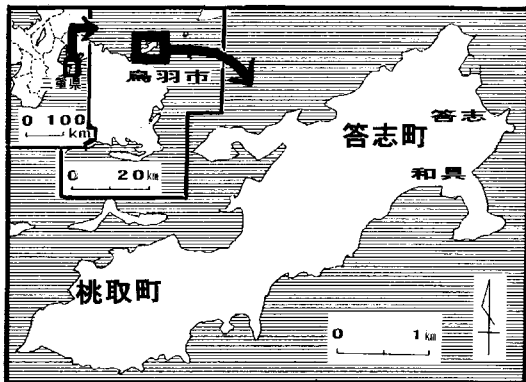


図1

ータスであると言う。この他、職業に関係ない組織として老人会がある。

漁業を主な生業とする和具でも最も力があるのは漁協である。町内会の立場は弱く、漁協の影響下にある。しかし、桃取は漁業従事者が少なく、漁協の力は他の2集落に比べ弱い。桃取では町内会が中心であり、集落はセコ・組によって組織される。桃取には4つのセコがあり、各セコ長の下には10人程の組員をまとめる組長がいる。セコ総代は選挙で選ばれ、寺の世話役も務める。

本稿では答志島における信仰習俗と集落組織の関わり方を考えたいと思う。伊勢志摩地方に共通して見られる「注連縄」と、答志島独特の習俗である「大般若札」を用い、各家レベルの信仰習俗と集落組織の関わりを見て行きたい。

2. 注連縄

答志島を含む伊勢志摩地方の住宅は、一年中玄関に注連縄(写真1)を張る。注連縄の形は大体同じで、太く絞った縄の中心に文字を記した木の板を置き、柑橘類の果実やシダ類の葉等を飾り、紙垂を垂らす。答志島ではダイダイの実とウラジロの葉を用いる。板には独特の配置で「蘇民将来子孫家門」²⁾と記し、右下に「七福即生」、左下に「七難即滅」の文句を記す。ダイダイは「代々家が栄える」など飾りにはそれぞれ意味があるが、意識して用いている住民は少ない。注連縄は各家が飾る為、家により差異があるが、集落によっても違いがある。

桃取集落ではタワラモと言う藻類を飾る。冬になると海岸に打ち上げられるので、浜から拾ってくる。藻を飾る習俗は他の2集落には見られない³⁾。

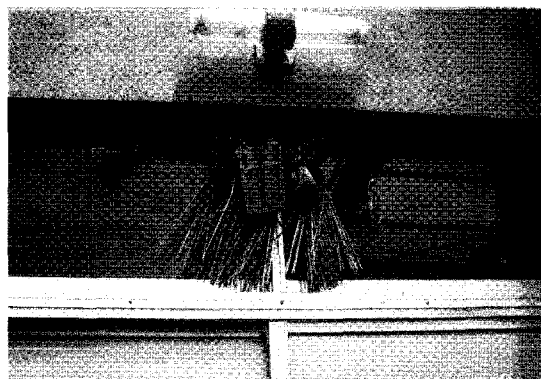


写真1 注連縄(答志)

しかし現在は、鳥羽市街地など(本土)で既製品を買う家がほとんどである⁴⁾。和具でも、以前は各家で作るか、上手に作る人に頼んでいたが、ここ数年は出来合いを買って来る家が多くなってきた。手作りする場合にはダイダイの有無など各家の慣わしがあったが、若い人は簡素化する傾向があるという。

答志でも以前は各家で毎年11月中頃から注連縄を作り始めた。板は懇意の大工が歳暮に贈る板を用い、ダイダイは八百屋から買う。炭を飾る家は少ないが、本当はつけるものだという。大体3人がかりで作るので、戸主の他にイマワリ(新亡)でない親戚や友人を1~2人呼んで作った。その時、礼として豆腐汁と酒を振舞った。自分で作らずに上手な人に頼む家もあった。

しかし現在、答志では老人会が集落の必要分を製作し供給している。昭和40年代頃からのやり方だという。2003年は400個程を作ったが、この中には和具や近くに住む親戚等からの注文分も含まれる。注文は各セコを通し、各家に配られるビラで告知され、組員から組長そしてセコ長へと注文数がまとめられる。製作した注連縄は11月中旬から月末にかけて各家に配られる。

老人会では、3人1組で作業し1日に40個程の注連縄を作る。4~5組いれば注文分を3日で作ることが出来る。平均して5分程で1個を作る。材料のワラは本上から買ってくる。作業には、役員21名と会員の中から上手な人を10人頼む。女性も、掃除やワラの端を切るなどの作業を分担する。こうして作製した物は市販品に比べ縄のない方が独特で手の込んだ作りになっている。この技術は父親が息子に手伝わせることで伝授されてきた。しかし現在では、若い人は注連縄を作らず(作れず)、作るのは老人だけである。長年作ってきた者でも満足する出来は2割程度だという。

注連縄は一年中飾るが、その家に不幸があった場合は降ろし、次の正月まで飾らない。掛け替える際に古い物を処分するが、その方法も各集落がそれぞれ独自に行っている。答志では、漁協脇の浜で各家毎に火を焚き、注連縄を燃やす。和具では、八幡神社側の浜で町内会が集落の分をまとめて焼く。大晦日の10時半から火を焚き始め、役員が火の番をする。近年鳥羽市のゴミ焼却場が大晦日の半日営業を開始し、負担の大きい町内会側はゴミ収集での処理を望んだが、住人の反発が強

く、今も浜での焚き上げが原則となっている。火を焚けない雨天のみゴミ収集としたが、今のところ、大晦日は晴天が続いており、以前と変わらず焚き上げが行われている。

3. 大般若札

大般若札（写真2）は答志と和具の間に位置する潮音寺⁹が配布する物である。家内安全、大漁満足などの利益があるとされる。これを大黒柱の他、玄関や窓など外界と接する場所に貼り、病気や邪悪が家内に入らないようにする。もち米や赤飯で貼る家もあるが、簡単に市販の糊を用いる家も多い。貼る場所は各家でそれぞれ決まっており、毎年、重ね張りする。お守りとして身につける者もいる。例年正月に配られ、不幸事があった家も必ずもらう。

配布される札は潮音寺の般若会¹⁰で祈祷された物だが、実際に配布する作業は各集落が行い、寺は関与しない。般若会で用いる大般若経は答志西セコ内にある般若堂に納められており（写真3）、西セコの若い衆（ジゲドウジ）が寺に運ぶ。運ぶ

前には海で潮垢離をして身を清め、1つ30kg程ある箱に注連縄をかけて肩に担い寺へと運ぶ。

答志では代々決まった家の主人が配る。札は2回に分けて、元旦にまず1枚、ついで4日に各家必要な分が配られる。配る際は股引と地下足袋を履き、動き易いように尻ツボミの着物を着る。札は専用の箱に入れて持ち歩く。多い家で150枚程、普通は50～60枚程度を配る。自宅用だけでなく、親類や島外で暮らす家族に送る家もある。朝6時から配り始め元旦は11時頃に終わるが、4日は数が多いので12時半頃までかかる。

各家に着くとまず独特の調子で「大般若」と大声で言う。「オット」と応えがあった後、玄関の上がり戸で札を渡す。札は相手が差し出した日の丸の扇子の上に置いて渡す。この扇子は八幡神社が布施の札として配る物でどの家も数本持っている。最近は扇子の代わりに盆で受けたり、素手でそのまま受けたりする家も多い。

配る順番は昔から決まっており、西セコから始め集落全体を巡り最後は寺に戻る。途中寄り忘れた場合は引き帰さず、住人には直接寺へ行ってもらう。神さまがその家には入るなど言った為だと

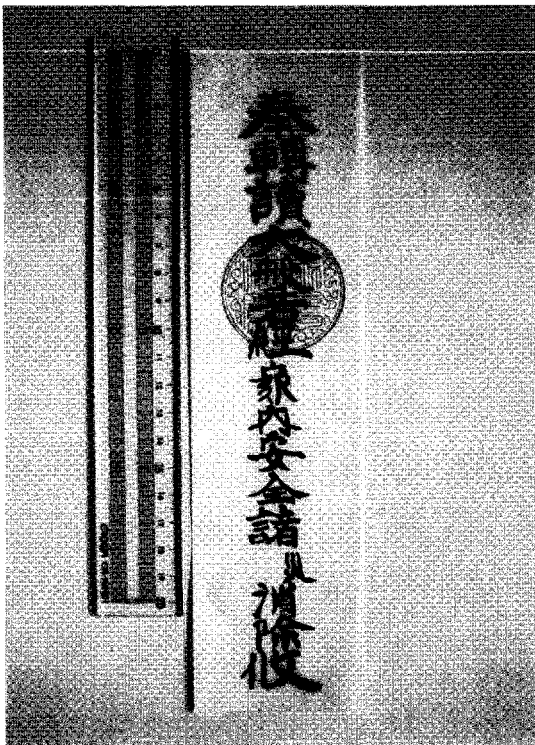


写真2 大般若札（横は20cm定規）



写真3 般若堂（写真中央奥。階段の途中から見る）

説明される。配る順番リストにして覚え、「キューソクの家」と言う特定の家やイマワリの家も書き込む。イマワリの家では玄関に入らず家人に外に出て来てもらうので注意が要る。この他にも決まり事が多くあり、代替わりの年は父親について一緒に回り覚えたと言う。

和具にも一時、答志から配りに来たことがあったが、現在は独自に配布している。和具でも大般若札に関わる家は決まっている。まず、寺役二人が寺から大般若札を受けて来て漁協に運ぶ。そしてテラショワニンが漁協に詰め、住人は各自漁協に取りに行く。配布は朝方から昼頃まで行われる。漁協は場所を貸すだけであり、町内会やセコ等の組織も配布には関与しない。札の配布はテラショワニンと住人の関係において行われる。また、昔は正月15日に炊く粥「ウカユサン」で札を貼っていたが、今はもらってすぐに糊で貼っている。

桃取ではセコ組織を通して札が配布される。セコ長が必要数をまとめ、セコ内の各家に配布する。その際10粒程度の米と一緒に配られる。

4. おわりに

各集落における習俗の差異は、歴史的あるいは伝統的な要因だけでなく各集落の現在の状況が大きく関係している。答志は伝統を保持する意識が強く、漁協の強い統率力の下、習俗の伝承・保持が図られている。一方、和具は町内会長の下で革新的な動きを見せている。これには漁協長経験者であった前町内会長により、漁協・町内会の緊張関係が緩和されたと言う要因がある。桃取は中学校の本上併合により本土との結びつきを強め、既にひとつの変化を越えた感がある。

現在、島内に2校ある小学校を統合する動きがある。各集落の独自性が薄れると同時に、習俗を含め、地域文化の変化は否めない。(梶山)

謝辞

現地調査では、桃取で一日お付き合い頂いた斉藤さんを初めとする桃取集落の皆さま、旅館「やま七」の皆さま、答志漁協の浜口さん、浜崎さん、和具町内会長山下さんを初め、お話をお聞かせ下さった答志島の皆さまに、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

註

- 1) セコ(世古)とは東海地方に見られる言葉で、集落内の小区画を言う。(民俗研究所編著『総合日本民俗語彙 第2巻』平凡社、1955年)
- 2) 蘇民将来伝説との関連が想像される。蘇民将来は厄病避けの神とされ、「蘇民将来子孫」と記したお札やお守りは広く見られる。(志村有弘・諏訪春雄編著『日本説話伝説大事典』勉誠出版、2000年)
- 3) 集落の立地によって藻が上がる場所に制約があるのだろうか。例えば、鮑は東向きに海を持つ答志が最も産出し、島の西部に位置する桃取ではほとんど産出しない。
- 4) 年末になると、市内の大型スーパーが1500円程度で売り出す。また、桃取では普段の買物も本土の駐車場を借りて車を置き、島外に出掛ける家が多い。
- 5) 白華山潮音寺、曹洞宗
- 6) 般若会は大般若経を転読する行事で、潮音寺では曹洞宗の行事として1時間程かけて行われる。

かじやま・さおり 博士前期課程・人文学専攻(歴史学コース)

うちだ・ただよし 博士後期課程・国際日本学専攻(日本分析論講座)助教授